

ジェーン・W・ラウドンの生涯¹

新妻 昭夫(人間社会学部人間環境学科)

Mrs. Loudon and Gardening for Housewives in Early Modern England

NIIZUMA Akio

ジェーン・W・ラウドン (Jane (Webb) Loudon: 1807-58) は最初期の女性園芸著述家の一人であり、今日の女性のガーデニングの先駆けとされている。彼女は19世紀前半の鬼才造園家ジョン・クラディウス・ラウドン (John Claudius Loudon: 1783-1843) の妻であり、夫が急逝した後、彼の大著『造園百科(Encyclopedia of Gardening)』(1822年)を幾度も改定したほか、彼女自身の著作も多数残されている。

彼女の著作活動の特徴を、いまの時点でわかる範囲で列挙すれば、(1)18世紀以来の社会的に女性に許された数少ないキャリアのひとつである啓蒙書ライターであった、(2)とくに評価の高い著作として女性や子ども向けの園芸や植物学の入門書がある、(3)雇われ編集長を半年間だけつとめた女性向け週刊誌は、ごく初期の「近代的な家庭婦人(主婦)」向けだったと考えられる。

ジェーン・W・ラウドンの生涯についての記録はごく限られている。彼女についての唯一の評伝²には、一人娘アグネス³の日記が利用されている。したがって彼女の生涯の後半部については、かなり詳細な事柄がわかっている⁴。また彼女の書き残した著書や雑誌論文・記事は数多く、またファクシミリ版などでリプリントされたものも多数ある。つまり、調査・分析すべきテキストは数多くあり、比較的調査しやすいといえる。

ジェーン・W・ラウドンの生涯は、大きく次の3時期に区分できるだろう。(1)結婚するまで、(2)結婚してから夫の急死まで、(3)夫の負債を抱えながら筆一本で娘を育て、短い生涯を終えるまで。図1はジェーン・W・ラウドンの曾孫が所蔵する彩色細密画⁵であり、これが彼女の唯一の肖像画とされる。

生い立ちと初期の著作

ジェーン・W・ラウドンは1807年8月19日、ジェーン・ウェルズ・ウェップ (Jane Wells Webb) として、イングランド中部のバーミンガムで生まれた。父親 (Thomas Webb) について詳しい記録はないが、比較的成功的なビジネスマンで、暮らし向きはそれなりによかつたらしい。

ジェーンが生まれ育った時代の英国は、フランスとのナポレオン戦争 (1796～1815年) のさなか、ジョージ三世 (在位 1760～20年) の治世だが、1821年には三世の言動が不確かとなり、息子のジョージ四世が政務を執行する「摂政時代」となった。1815年にはワーテルローの戦いでフランスに勝利し、またバーミンガムの町は着実に工業化しつつあった。

母親は1819年に他界した (母親の名前は記録に残っていないらしい)。失意の底に落ちた父親は翌年、12歳のジェーンを連れて1年間、大陸の各地を旅行した。帰国すると、経済的な不況の影響もあってか仕事をリタイアし、バーミンガムから11キロほどの小村 (Bartley Green) の村はずれにあった



図1:ジェーン・W・ラウドンの肖像。

Kitwellの屋敷⁶で暮らしはじめた。

田舎での父と娘の二人暮らしゆえに、ジェーンは家事を采配すべき主婦の役割を担うこととなり、その経験は後の著作『*The Lady's Country Companion: or How to Enjoy a Country Life Rationally*』(1845年)などに生かされた。ガーデニングにいそしむ時間も土地も十分にあったはずだが、こちらにはあまり興味がもてなかつたらしい。冬は読書にふけり、春からは季節におうじて散策や乗馬など野外での遊びをそれぞれに楽しんでいった。

父親は妻の教育方針を受け継ぎ、家庭教師 (ガヴァネス) をつけてジェーンを教育した。彼女がはじめて出し

た自費出版の本『*Prose and Verse*』(1824年)に収められた次の詩⁷に、一人娘ジェーンの父親への信頼と愛情を、また母親と父親の教育方針もうかがうことができるだろう。

With tender pains from earliest youth
You trained my steps in virtuous route,
Taught me to know her worth and truth,
And tread the path you pointed out.

1824年、父親が他界した。ジェーンはまだ17歳だった。詳しい事情はわからないが、彼女自身の言葉によれば、「彼〔父親〕の後始末を整理していくなかで、生活費のためになにかしなければならぬことが判明し、私は『*The Mummy*』という風変わりな粗雑な小説を書いた」⁸。彼女は父親の死の前後に、すでに一冊目の本を出していた。10代の前半から書きためていた詩や小説を編んだ『*Prose and Verse*』(1824年)という小品であり、父親が他界する半年ほど前から本にする準備をしていたという。

彼女の2冊目の本『*The Mummy!: A Tale of the Twenty-Second Century*』が出版されたのは1827年、彼女は20歳になっていた。ミイラになった男が300年後の2126年に生き返り、自らの生前の反省から、混乱した政治と社会を改善しようと努力する物語である。いま流通しているペーパーバック版を編集したAlan Rauchによれば、空想小説と冒険小説と怪奇小説の寄せ集め的な作品であり、当時の女性ならではの道徳性の強調がこの作品の特徴だという。

時代はまだ19世紀の前半であり、それなりの家に生まれた若い女性が自立する手段は限られていた。細密肖像画を注文に応じて描くか、婦人帽など小物を作るか、あるいはガヴァネス(住み込み女家庭教師)になるかである。ジェーンより9歳年下のシャーロット・ブロンテも、その二人の姉妹も、小説家になる前にガヴァネスを経験している。最初から小説家を目指したジェーン・W・ラウドンは、当時の若い女性としては、あまり前例のない道を選んだとっていいだろう。

当時、エジプトやミイラのことが高く世間の話題になっていたと考えられる。古代エジプトの神殿を模した「エジプシャン・ホール (Egyptian Hall)」がロンドンのピカデリーに開館したのは1812年、有名な「ロゼッタ・ストーン」は1802年から大英博物館に展示され、古代ギリシャ語と2種類のエジプト語(神聖文字と民衆文字)で刻まれた碑文がジャン＝フランソワ・シャンポリオンによって解読されたのは、わずか数年前の1822年のことであった。

また若い女性が空想科学小説を書くことも、ジェーン・W・ラウドンがはじめてではない。彼女より10歳年上のメアリー・シェリー⁹が『フランケンシュタイン (*Frankenstein: or The Modern Prometheus*)』(1818年)を出版したのは19歳のときだったし、ちょうど『*The Last Man*』(1826年)が出たばかりであった。じっさい、ジェーン・W・ラウドンの『*The Mummy!*』は、シェリーの作品の焼き直しといわれることもある。

当時の若い女性がSF作品を、しかも生活の糧として書くということじたいが興味深い。上述のAlan Rauchは、ジェーン・W・ラウドンがロンドンのジョン・マーチン宅にしばしば滞在していたことを重視している。ジョン・マーチン (John Martin: 1789-1854) は英国ロマン派の画家である。Alan Rauchはジョン・マーチンの評伝¹⁰を調べ、彼が当時の文人たちと親しく交際していたことを指摘する。そのなかには詩人のトーマス・フッド (Thomas Hood: 1799-1845)、ジャーナリストで小説家のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin: 1756-1836)、歴史小説家のアインスワース (William Harrison Ainsworth: 1805-1882) などがいた。ジェーンはマーチン宅でこれらの文人たちと出会って小説家を志望するようになり、また『*The Mummy!*』の執筆と出版にあたっては彼らと相談しただろうというわけだが、この点について確証があるとはいいがたい。

本論にとってもっとも重要なことは、ジョン・C・ラウドン (John Claudius Loudon: 1783-1843) が彼女の作品に目をとめたことである。稀代の鬼才造園家であり、1822年に出版された『造園百科 (*Encyclopedia of Gardening*)』は半世紀以上にわたって版を重ね、また1826年には雑誌『*Gardener's Magazine*』を創刊し、みずから編集と執筆に腕をふるって造園・園芸界をリードしていた。ラウドンが関心を惹かれたのは、この作品に描かれた蒸気式の耕運機や芝刈

り機や搾乳機、あるいは22世紀の世界における公園や公共墓地についてだったのだろう。

結婚(1830年)、そして女性園芸ライターとしての再出発

ジョン・C・ラウドンは自分の雑誌『*Gardener's Magazine*』に、この若い作家のSF作品を評価する書評を書き(タイトルは「改良のヒント(Hints for Improvements)」)、このSF作家に一度会ってみたいと知人を介して伝える手はずをとった。二人が出会ったのは1830年2月、彼の製図室だった。このときのことについてジェーンは次のように書き残している¹¹。

『*The Mummy*』の著者が女性だと知って彼が驚いたと誰もが思うかもしれませんが、あの夕べから彼は私への愛着をもったと私は信じていますし、じっさい、私たちはこの年の9月14日に結婚したのです。

新婦ジェーンは23歳、新郎ジョンは47歳であった。新居はロンドンのケンジントン・ガーデンズの北側、バイズウォーター(Bayswater)地区にジョン・C・ラウドンが1823年に建てた家¹²である。この家はラウドンが「別荘風邸宅(villa residence)」と呼ぶ様式で、その設計趣旨などは彼の『*The Suburban Gardener and Villa Companion*』(1838年)で説明されているという。

しかし、この家はただの住宅ではない。夫が編集する『*Gardener's Magazine*』の編集事務所であり、関係者がひっきりなしに出入りしていた。また造園設計事務所でもあり、製図版と参考書が所狭しと並んでいた。建物の周囲の庭は新たな花壇設計の実験場であり、また各種の植物の栽培試験がおこなわれる実験圃場でもあった。

彼女は結婚の前後に二冊の本を出している。『*Stories of a Bride*』(1829年)と『*Conversations Upon Comparative Chronology*』(1830年)である。前者は『*The Mummy*』の評判がまずまずだったことに励まされて書いた二作目の小説。後者は天地創造からキリスト生誕までの出来事が、「Mrs. Seymourと彼女の二人の娘、IsabellaとLota」の会話形式で書かれている。会話形式と手紙形式は、当時の女性や子ども向けの啓蒙書によく見られたスタイルである。

しかし、執筆活動は1830年の結婚を機に中断し、2年後の1832年10月28日に一人娘(Agnes)¹³が誕生した。

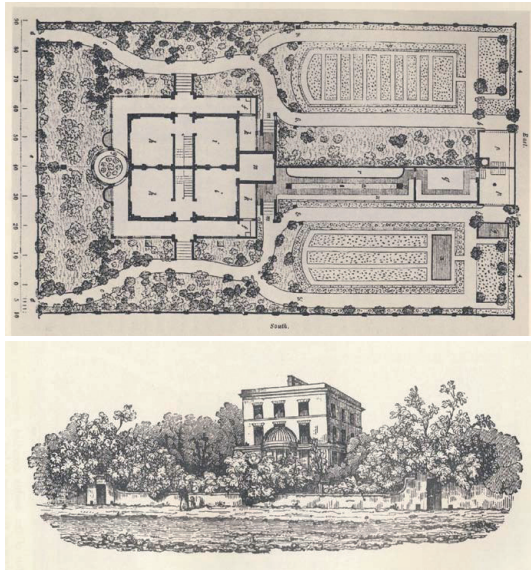


図2:「No. 3 & 5, Porchester Terrace」にあったラウドン設計の2世代用別荘風邸宅と庭の平面図。

新婚家庭のすぐ南にあるケンジントン・ガーデンは、幼いアグネスの手を引いたジェーンのお気に入りの散歩コースであった。ケンジントン宮殿でヴィクトリア王女の18歳の誕生日が盛大に執り行われた1837年5月24日には、ラウドン夫妻の家の周囲は地方からやってきた市民を乗せた馬車でごったがえし、ラウドン親子三人も宮殿前の見物人の群衆に混じていたという。そして1837年6月20日には、ウィリアムIV世の死去にともない18歳になったばかりのヴィクトリアが女王に即位することとなった（戴冠式は6月28日）。

執筆活動が再開されるのは結婚から9年目の1839年、『*Agnes, or the Little Girl who could Keep a Promise*』が出版され、翌1840年には『*The Young*

Naturalist's Journey: or The Travels of Agnes Merton with Her Mama』が出た。一人娘アグネスが6~7歳になって子育てが一段落したのだろう。娘とともに新たな分野を拓こうという意気込みが、タイトルから感じられる。

そして1840年、彼女の執筆分野が大きく変化する。女性のためのガーデニングの本である。この分野の一冊目が『*Instruction in Gardening for Ladies*』（1840年）であり、彼女の著作のうちもっとも成功した一冊とされる（発売当日に1350冊が売れ、その年のうちに3版を重ねた）。

この本が売れたということは、この種の本すなわちガーデニングの指南書をもとめている女性がそれだけ多かったということだろう。庭付きの住宅で暮らすことができるほどには裕福だが、住み込みの庭師を雇うほどには裕福でない家庭の女性である。いわゆる「アッパー・ミドル (upper-middle)」階級と考えていいだろう。家事については使用人に指示するだけで自分が直接に手を出すことはないが、庭仕事は別ということになる（今日の女性であれば、庭仕事は日雇いの庭師に任せて、家事とくに料理に力をいれるという選択肢もあるだろう）。

とはいえ成功のいちばんの理由は、女性が女性に向けて書いただけでなく、素人が素人に向けて書いたことだろう。序文で彼女自身もはじめは無知だったことを告白している。

ラウドン氏と結婚したとき、植物やガーデニングに関するあらゆることについて、私以上に無知な人がいるとは、想像することさえほとんど不可能でした……職業庭師用に書かれた本がアマチュアの必要に適していることはめったにありません。そのことに生涯のあいだ慣れ親しんできた人には、それについて何も知らない人の無知がどのようなものか想像することが困難なので、達人といわれる人たちは自分たちのもっている知識を伝えることを、しばしば不可能だと知ることになります……私自身が大人の生徒でしたので、同じような境遇の人たちが何を望んでいるかを知っています。また私が書いていくことすべてについて、それがなぜかの理由がわからなければ満足できたことは一度もないので、それらの理由を読者の人たちに分け与えることができるでしょう¹⁴。

巻頭に掲げられた献辞は、次のとおり——「以下のページの著者がこの主題について有する知識のすべてを負うJ・C・ラウドン殿（リンネ協会、園芸協会、動物学協会等々会員）に、本書は彼の愛する妻J.W.L.によって捧げられる」。ラウドン夫妻の自宅は、庭園の設計や本や雑誌の執筆・編集のための事務所でもあり、ジェーンは妻としてだけでなく、秘書や助手として夫の仕事を手伝いながら、結婚して10年のあいだに、まったくの素人からガーデニングの手引書を執筆するまでに成長していた。

この本の特徴は、女性ならではの視点と実践的な視点にある。最初の章では土地の耕しかたが解説され、つづいて施肥と温床作り、種まき・球根の植え方・移植・水やり、株分けと接ぎ木・挿し芽、剪定……と続いていくが、最初の章だけを斜め読みするだけで、この本が女性たちに歓迎された理由がわかる¹⁵。

ジェーンは、スコップ(spade)で土を掘るような仕事は重労働であり、自分たちのか弱い手足には無理なこととと思っていたと正直に告白する。しかし、「この作業の力学の原理と動作の法則にすこし注意を向ければ、労働はずっと単純なものとなり、それほど大変なことではなくなります」。



図3:ジェーン・W・ラウドン『Instruction in Gardening for Ladies』(1840年)の扉絵。この本で推奨されている庭仕事用の服を着たモデルは、ジェーン本人と娘のアグネス(7歳)と思われる。足元や手に持った道具類にも注目されたい。

そして、庭師が地面を掘り返す作業は次の三つの動作からなると指摘する。まず①「スコップの鉄の部分は、クサビのような働きをするので、足を使って地面に垂直に突き刺します」。次に、②「長い柄をテコの要領で使い、掘りとれた土を持ち上げてひっくり返します」。このようにして「掘り上げた土の量を一掘り分[a spitful]といいます」。そして③「庭師は一掘り分を掘り上げると、土のかたまりをスコップの鋭利な角で叩いて崩し、その背の部分で平らにします」。

きわめて科学的な観察と分析にもとづく、きわめて合理的で実践的な指南であり、150年以上も昔の本だとは思えないほどである。

彼女の合理主義は徹底したもので、作業の要領を工夫する以前に、女性に適した道具を手に入れることこそ労働を軽減する最良の方法だと指摘する。同じスコップを例にあげれば、鉄の部分が滑らかで幅が半分ほどしかない婦人用の使用を勧める（鉄の部分の幅が狭いので、足をかける踏み板のようなものが装着されていたらしい）。柄の部分も「滑らかで、婦人の手で握れるよう細身の……ヤナギ」がよく、その理由は材質が「緻密で滑らかで柔軟性があり……庭師用のスコップの柄によく使われているトネリコよりずっと軽いにもかかわらず、丈夫でかなり強い」からだという。

以上、冒頭に近い2ページ分(pp. 9-10)から拾い出したのだが、本書の人気の秘密がなんとなくわかる気がするだろう。

女性のために女性が書いたガーデニング本

ジェーンは同年に『*The Ladies' Flower-Garden*』の第I巻（観賞用1年生植物）も出している。最初は月刊の分冊形式（一部2シリング6ペンス）で発行されたらしい。一枚に近縁な数種類の花が描かれた手彩色石版画の美しい図版集であり、ちなみに古書のカタログを開いてみると目玉が飛び出るような値段がつけられている¹⁶。1841年に第II巻（観賞用球根植物）、1842年に第III巻（観賞用多年生植物）……と続くが、この企画はすでに数年前には立てられていたもので、『*The Gardener's Magazine*』の1838年12月号に、編集人ジョン・C・ラウンによって「廉価で魅力的な本によって女性のための植物学と装飾的ガーデニングを普及させる」企画が予告されていた。この1838年は、

ラウドン夫妻にとって一大転機となった年であった——ジョン・C・ラウドンが莫大な負債を抱えることになったのである。

ジョン・C・ラウドンは史上稀に見るワーク・ホリックだったが、彼が手がけた百科辞典、著書、雑誌のいずれも彼一人の時間とエネルギーだけでできるものではなく、かなり膨大な資本投下が必要だったと考えられる。その意味で彼は進取の気性に富んだ職人的な起業家だったといえるが、むしろ「山師」的な性格だったと考えた方がいいのかもしれない。1822年刊行の『造園百科(*Encyclopedia of Gardening*)』は半世紀以上ものあいだ版を重ね、1825年には『農業百科(*Encyclopedia of Agriculture*)』、1829年には『植物百科(*Encyclopedia of Plants*)』が刊行された。彼が編集人として1826年に創刊した園芸雑誌『*Gardener's Magazine*』は、好調な年には750ポンドもの収入をもたらしたが、やがて競合誌『*Horticultural Register*』(1831年創刊)の出現によって売り上げは激減した。この競合誌の編集人は、同じように職人的起業家精神を備えたパクストン(Sir Joseph Paxton: 1803-65)¹⁷だった。

ジョン・C・ラウドンは起業家精神を発揮して次々に新しい本や雑誌を企画し、また大きな庭園や公共墓地の設計を請け負った。しかし、1832年から刊行を開始した『*Arboretum et Fruticetum Britannicum*』が、結果的に見れば、最大の躓きの石となった。大判で細密な図版のため費用がかさんでいき、1838年に完結したときには負債が1万ポンドに膨れ上がっていた。



図4:『*The Ladies' Flower-Garden*』の図版の一例(CD-ROM版より)

ビジネスを好転させようと、ワーク・ホリックのジョン・C・ラウドンが次々と新たな仕事に着手したことはいうまでもない。また妻のジェーンも子育てが一段落した時期であり、夫を手助けするだけでなくみずからの著書を次々に書いた。上述の『*Instruction in Gardening for Ladies*』（1840年）がその手始めであり、同年に刊行が開始された『*The Ladies' Flower-Garden*』シリーズもそうである。ジェーンは結婚前から著作を職業とする道を選ぼうとしていたのだから、ごく自然な流れではあっただろう。

しかし、そこには夫の野心的な起業家としてのねらいも強く働いていたと考えられる。莫大な負債があきらかになった1838年、ジョン・C・ラウドンは新刊の『*Suburban Gardener and Villa Companion*』に次のように書いている。

花が好きではないご婦人など、まずめったにお目にかかれない。しかし、庭の設計に有能なご婦人はほとんどいないと断言してもいい過ぎにはならないだろう。庭の設計に必要な技能は、婦人服のあれこれの部分を切り分け、縫い合わせることができる、すべての女性の能力の範囲をはみ出すものではない……マンチュア〔女性用のゆったりした上着〕の縫製や婦人小物作りをしている女性で、自分の仕事を理解している人ならば、あるいはそうでなくても、職業ランドスケープ・ガーデナーと同じほどの技能と審美眼で設計することを、数時間ほどで教わることができるかと断言してもかまわないだろう。そうすれば、英国の田園邸宅〔country residence〕の大多数の花の庭で見られるよりも、比較にならないほどよい結果が生みだされるだろう。

ジョン・C・ラウドンのこの予想は、妻ジェーンが夫の仕事を手伝いながら知識と技術を着実に増しつつあるという実感に裏打ちされていたのだろう。さきに見たジェーン・W・ラウドンの初のガーデニング本『*Instruction in Gardening for Ladies*』（1840年）の序文と献辞から、ジェーン自身にも夫の期待に応える自信がすでにあったことがうかがえる。

じっさいジェーンは1840年以降、女性のためのガーデニング本を次々に出していく。1841年には『*The First Book of Botany*』と『*The Ladies' Companion to*

the Flower Garden』、それに『*The Ladies' Flower Garden*』の第Ⅱ巻、1842年には『*Botany for Ladies*』、そして1843年には『*The Ladies' Flower Garden*』の第Ⅲ巻。

『*The First Book*』は植物学の入門書であり、主要部分はカンドル¹⁸による植物分類学の紹介だが、その前段として植物の形態学・解剖学と落葉と常緑など生活型による区分が解説されている¹⁹。『*The Ladies' Companion*』は主として植物の英名と学名を解説した辞典形式の本である²⁰。『*The Ladies' Flower Garden*』の第Ⅱ巻と第Ⅲ巻については、すでに説明した。

『*Botany for Ladies*』は植物学(分類と形態)の教科書であり、目を単位に章分けされ、各章の内容は属ないし族ごとの解説となっている²¹。彼女は結婚してまもなくの1831年、園芸協会²²が御婦人たちの関心を喚起するために開催したリンドリー氏²³による6回連続の植物学講義に出席し、またリンドリー『*Ladies' Botany*』(1834年)を愛読して植物学を学んだ。自分の『*Botany for Ladies*』の序でも、リンドリーの教科書だけは他の男性植物学者の本と同列には語れないと称賛している。

興味深いのは、『*The First Book of Botany*』(1841年)でも『*Botany for Ladies*』(1842年)でも、リンネの分類体系ではなくカンドルの自然分類体系を採用していることである。リンドリーがそうであったからというのも、その理由ではあるだろう。しかし彼女は『*Botany for Ladies*』の序を次のように書きだしている——「子どものころ、私は植物学を学ぶことがどうしてもできませんでした。リンネの体系(そのころ教えられていた唯一の体系)には、私にはなんといかどうにも不快な[repugnant]なところがあり……」。おそらく雄蕊と雌蕊の本数による「性体系」への嫌悪感と思われるが、この潔癖感にはジェーン個人の性格というよりも、あの時代の感覚なのかもしれない。筆者としては、それ以前の時代の英国でリンネのあからさまに性的な言説がどうして好まれたのかのほうに、むしろ奇妙な思いを感じてしまう²⁴。

ジェーン・W・ラウドンはこの時期、女性向けの園芸雑誌も編集していた。1842年1月に創刊された『*The Ladies' Magazine of Gardening*』である。月刊で各号30ページ、値段は1シリング半(18ペンス)だったが、わずか11号で休刊となった。休刊の理由は不明だが、前年の夏ごろから夫の健康状態に不安要素がたびたびあらわれていたことも、要因のひとつだったのではと考えられ

る。

このほかに児童書も二冊出している。『*The Year-Book of Natural History for Young Persons*』(1842年)と『*The Entertaining Naturalist*』(1843年)である。後者は、すでに定評のあった本を児童向けにリライトするよう出版社から依頼されたもので、当時の名だたる挿絵画家たちの木版画で飾られている。彼女の書き手としての能力が社会的に認知されていた証拠といえよう。言い換えれば、彼女の書いた本が世間で広く求められていたということだ。

ジェーンの文筆の才能は、夫の認めるところでもあった。『*Gardener's Magazine*』の1842年12月号に彼女の二冊の本、『*The Ladies' Companion to the Flower Garden*』(1841年)と『*Botany for Ladies*』(1842年)の書評が掲載されている。後者を「成人した人々、アマチュア、男性あるいは女性に植物の自然体系を紹介する、これまでに出版された最高の本」と絶賛し、「この二冊は、これまでの本のどれよりも我々の誇りである」という。この書評の署名はイニシアルで「J.L.」、夫のジョン・C・ラウドンその人であることは自明であろう。

夫の負債と一人娘を抱えて

1843年に出たもう一冊も出版社からの依頼による。『*Glimpses of Nature during a Visit to the Isle of Wight*』であり、ワイト島を娘と散策しながら動植物を観察し、「ふつうの土地をふつうに旅行しただけでも、どれほど多くのことが学べるか」が生き生きとした文章でつづられている。しかし、いま手元にある第2版(1848年刊)の序文の冒頭部分を読むと、どうしてこれほど楽しそうな本が書けたのか首をかしげてしまう。

1843年は8月21日、ラウドン氏と小さな娘のアグネス、そして私は、本書に記録したワイト島をめぐる旅をなすべく、ベイズウォーターを出発しました。

この旅行はその後、私の眼には物悲しきで重々しくうつるようになってしまいました。あわれな夫との最後の旅行になったからで、この本の出版から一カ月もしないうちに彼の死が訪れたのですが、原稿を書いているときには彼が危険な状態にあるとは露ほどにも意識していません

でした……

ワイト島に着いてまもなく夫の体調が悪化し、やむなくジェーンは娘のアグネスと二人だけで旅行をつづけた。帰宅してからも夫の病状は一進一退を繰り返し、そしてこの年も暮に近づいた1843年12月14日木曜日、夫ジョン・C・ラウドンが急逝した。

夫は負債を死後に残さないため、夜を徹して『*Self-Instruction*』の原稿を妻に口述筆記してもらっていた。また負債の返済についての交渉も断続的にかさねていた。しかし12月13日の夜には刀折れ矢尽きたことを認めたのか、「*Self-Instruction*を書きあげるまで生きられない」と大きな唸り声をあげ、考えごとをするときのいつもの癖で、製図室のなかを行ったり来たりしはじめた。やがてカーテンのあいだから冬の朝日が差し込みはじめたとき、夫の顔色が急激に青ざめ、あわてて駆け寄ったジェーンの腕のなかに倒れこんだ。60歳の波乱万丈の生涯であった。

夫の死後のジェーンの人生は、11歳のアグネスを抱えた36歳の女性にとって、当時であっても今日であっても、楽なものであったはずがない。父親が死んだ17歳のときと同じように、「生活費のためになにかしなければならぬ」とことはあきらかであった。しかも夫が残した膨大な負債が彼女の肩に重くのしかかっていた。

彼女にできることは、唯一、本を書くことしかなかった——夫の死から15年後の1858年、51歳を目前にして世を去るまでに、さらに8冊の本を書いた。しかし、それらの本の内容について、ここでとくに説明を加える必要はほとんどないといっている。

唯一の例外といえるのが、『*The Lady's Country Companion, or How to Enjoy a Country Life Rationally*』（1845年）。結婚して田舎の屋敷で暮らすことになった「姪のアニー」という若い女性を想定し、田園邸宅での暮らしのアドバイスが手紙の形式で書かれている²⁵。この本の特徴というべきは、ジェーン自身の体験（退職後の父親との田舎暮らしと、結婚後のベイズウォーターでの「別荘風住宅」での暮らし）にもとづいていると考えられることと、そして当時の「中流上層階級」の「家庭婦人（専業主婦）」のあり方が描かれていることであ

る。

使用人が何人もいる生活であり、今日的な意味での「専業主婦」の実態とはあまりにもかけ離れてはいるが、ジェーン自身や彼女と同じような社会的な位置づけにあった主婦の暮らしぶりを知ることができる。夫の急逝と負債がなかったなら、彼女自身がそのような生活を実践しつづけていっただろう暮らしである。

だが現実はそうではなかった……本稿がおもに依拠している評伝（注2参照）のこの時期から以降のページは、ため息なしに読み進むことはできないだろう。ジェーンは屋敷の維持に苦勞しながら、やや奔放な娘アグネスの二度の失恋をただ黙って見ているほかに、結局は、彼女の幸せを願いつつ世を去ることとなった。アグネスは才能ある両親のもとで育った一人娘として、さまざまなチャンスに恵まれながらも児童書をいくつか書くにとどまり、母親を数年遅れで追うように人生を終えることとなった(享年31)。

ジェーンが書いた本も、また彼女が改訂した夫の本も、売れ行きが着実に下りはじめていた。19世紀も半ばを迎えて産業革命の成果が社会に定着し、時代は急激に変化しはじめていた。

夫の園芸雑誌『*Gardener's Magazine*』はその死をもって廃刊となり、代わって1841年に創刊された週刊園芸新聞『*ガーデナーズ・クロニクル*』が急速に勢力を拡大していった。編集人の一人パクストン²⁶は業務用や家庭用の温室など、園芸関連資材のビジネスにも才能を発揮し、その絶頂は1851年のロンドン万博の会場「水晶宮（クリスタル・パレス）」²⁷の設計であった。この雑誌の共同編集人リンドリー²⁸は、1829年にロンドン大学の初代の植物学教授に就任して1860年までその席にあり、またロンドン園芸協会(後の王立園芸協会:RHS)の事務局長としてフラワー・ショーを開催するなど協会の基盤の確立に主導的役割をはたしていた。

ジェーンは園芸協会の庭園（当時はChiswickにあった）やフラワー・ショーでは「ミセス・ラウドン(Mrs. Loudon)」として歓迎されていたが、自宅から目と鼻の先のケンジントン・ガーデンに隣接するハイド・パークに建設された「水晶宮」で1851年5月1日に開催された「ロンドン万国博覧会」の式典には、自宅を貸しに出して大陸を旅行していて出席していない。自宅の周辺は地

方からの見物客などでごったがえしていた。帰国したのは6月10日で、その翌日には「水晶宮」をアグネスと訪れ、青春時代の作品『*The Mummy*』で描いた未来の宮殿との共通点を探したり、植栽されている熱帯植物などを見ては夫のことを思い出したりしているが、見物客の群衆のなかに二人が何者かに気づいた人がいたかどうかは疑問だろう。

暗雲がたちこめるような状況のなかでの唯一の救い（ジェーンとアグネスにとっても、また一世紀半後に彼女たちのことを調べている私にとっても）は、夫の死の翌年、傑出した園芸家の未亡人として王室費（the Civil List）から年間100ポンドの年金の下賜が決定したことだろう。また博物学者、探検家で随筆家だったウォータートン（Charles Waterton: 1782-1865）が、風変わりな援助の手を差し伸べてくれた。彼の二冊目の『随筆集（*Essays*）』（1844年）の印税を、「不幸な友人であるラウドン氏の未亡人への、求められてはいない寄付」としてくれたのである。

夫の死後のジェーンの行動には、今日の視点からみて理解しがたいことがいくつかある。その第一は、バイズウォーターの自宅の維持が困難になるたびに、この屋敷を知人などに数カ月から半年ほど貸しては大陸を旅行し、フランスやイタリアの知人（画家や作家）を訪ね歩いていることである。出版社などからの依頼があつての取材旅行ではない。アグネスと自分の教養を高めることだけが目的であり、今日の基準に照らせば金持ちの遊興であり、家計をさらに悪化させるだけの散財としか思えない。

しかし彼女の性格から考えて、当時は屋敷の維持より旅行のほうが経済的にずっと安上がりだったのだろう。使用人を何人も雇つての屋敷の維持は、今日からは想像もつかないほど経費がかさむことだったにちがいない。

理解しづらいもう一点は、喪の期間が過ぎると、しばしば晩餐会（dinner party）を開いていることである。常連客は小説家や画家などであり、たとえば画家のエッグ（Augustus Egg: 1816-63）はアグネスを誘って作家コリンズ（Wilkie Collins: 1824-89）の作品を上演し、アグネスの初舞台の観客のなかにはコリンズ夫妻のほか、人気作家ディケンズ夫妻もいた。作家や芸術家、あるいは出版者や編集者²⁹との交際は、夫の生前からの習慣だった。

女性週刊誌の編集長に抜擢される

ラウドン夫妻の交友関係のなかで、本稿との関係でもっとも注目すべきは小説家ディケンズ (Charles John Huffam Dickens: 1812-70)³⁰とその一派である。上記のエッグとコリンズもディケンズ一派であり、またディケンズ編集の週刊誌『*the Household Words*』の副編集長ウィルス (Mr. Wills)、週刊風刺漫画誌『パンチ (*Punch*)』の編集長レモン (Mark Lemon: 1809-70)、風刺画家のリーチ (John Leech: 1817-64)、劇作家のジェロルド (Douglas Jerrold: 1803-57)、小説家のサッカレー (Thackeray: 1811-63) などが、ジョン・C・ラウドンの交友関係に名前を連ねていた。

ディケンズその人というよりも、ここに名前があがってきたふたつの雑誌、『*the Household Words*』と『パンチ (*Punch*)』にこそ注目すべきなのかもしれない。前者は1850年、後者は1841年の創刊だが、発行元はいずれも「Bradbury and Evans」社である。

アグネスが母親から日記帳をプレゼントされた17歳の誕生日 (1849年10月28日) の数日後、「Bradbury and Evans」社のエヴァンズ氏からジェーンのもとに書状が届いた。良識ある女性向けの週刊誌をできるだけ早急に創刊したく、その編集長になってほしいという内容だった。雑誌の名前は『*The Ladies' Companion: At Home and Abroad*』。ジェーンが即座に快諾したことはないまでもない。なによりも生活のためであり、また文筆活動の新たな分野に挑戦したいという気持ちもあっただろう。

この雑誌を舞台にジェーン・W・ラウドンがどのような活躍をしたか、あるいはどんなことを試みようとしたかについては、今後の課題としたい。その理由は、この雑誌の該当する巻が大英図書館 (the British Library)³¹にしかないことが判明し、実物を手にする機会をまだ得ていないからである。ただし、主要な号の目次はウェブ上で見ることができる³²。ここでは概要だけを手短かに紹介しておこう。

創刊号は1849年12月31日発行。クリスマス・イブにジェーンはお祝いの晩餐会を、ベイズウォーターの自宅(いまや編集室)で開いた。集まった客人のなかには、トラファルガー広場の4頭のライオン像を制作した画家・彫刻家ランドシーア (Edwin Henry Landseer: 1802-73) 夫妻、作家のウィルキー・コ

リンズとその末弟で画家チャールズ・コリンズ (Charles Allston Collins: 1828-73)、挿絵画家で昆虫学者でもあったハンフリーズ (Henry Noel Humphreys: 1810-79) とその妻、作家ウィリアム (William Howitt: 1792-1879) と詩人メアリー (Mary Howitt: 1799-1888) のホウイト夫妻がいた。

ジェーンは夫の雑誌を手伝いながら身につけた編集の腕をふるい、自身も創作、実用記事、読者からの質問への回答と、毎号何本もの記事を書きつづけた。しかし、創刊後すぐに風向きが変わりはじめた。版元のエヴァンズ氏に呼び出され、副編集長のホラス・メイヒュー (Horace Mayhew)³³ が抜けて、トム・テイラー (Tom Taylor: 1817-80)³⁴ が副編集長になると告げられた。ようするに、売れ行きが思惑ほどではなかったということらしい。その後、二転三転を繰り返したが、結局、ジェーンは編集長の地位から引き下がらざるをえなくなった³⁵。

『*Ladies' s Companion*』のジェーンが編集人を務めた最終号は、1850年6月22日に発行された。その号に彼女は、「女性の状況について一言 (A Few Words on the Condition of Woman)」という一文を書き残した。

ほんとうの生き生きとした幸福は、ただその人自身のみにかかっています。もし心がこの真実をいったんつかみとることができたなら、そして、そこからのみ湧き出してくる唯一の源泉から幸福を引き出す決意と勇気とがありさえすれば、私たちは永遠に、迫りくる嵐に動じることはないし、恐怖に打ちのめされることもないし、試練に打ち負かされることもありません。

この前後の時期のアグネスの日記には、どん底に突き落とされた思いをしめす取り乱した言葉が残されている。しかし母親のジェーンが嵐に動じたり恐怖に打ちのめされたり試練に打ち負かされたりした形跡はない。

女性週刊誌の編集長として奇跡の復活をはたした彼女だが、その後、復活のチャンスは訪れないまま、8年後の1858年7月13日に息を引き取った。最後まで自分を見失うことのない50年と11カ月の生涯であった。肺など呼吸器系の疾患が死因だが、その遠因が「過労」にあることは疑いないだろう。

- 1 本稿は園芸文化研究所の一般研究助成「ジェーン・ラウドンと近代初期の主婦の園芸」の2009年度の報告書である。
- 2 Howe, Bea, 1961. *Lady with Green Fingers: The Life of Jane Loudon*. Country Life Limited (London). 表題に使われている「Green Fingers(緑の指)」という言葉はOEDで調べてみたところ、初出は「1934年:R. Arkell, Green Fingers (title)」で、1940年代半ばから一般に使用されはじめたとなっていた。私は古い言葉だと誤解して、「緑の指」と聞くとヴィクトリア朝の女性とガーデニングをイメージしていた。おそらくパーネット『秘密の花園』(1909年)の印象が強すぎたのだろう。なお、Arkell, R., 1934. *Green Fingers* がどのような本か、ウェブ上の古書情報などを調べてみると、詩集で副題は*A Present for a Good Gardener*となっている。ガーデニング賛歌のような詩集なのだろう。続編もあったようで、またさまざまな版がでているので、根強い人気をうかがうことができる。
- 3 アグネス・ラウドン (Agnes Loudon, later Agnes Spofforth:1832-63)。二冊の児童書を書き残した。『*Tales for Young People*』(1846)と『*Tales of School Life*』(1849)で、前者は母親との共作。また1844年に、やはり母親との共作の *The Lost Groves* が週刊の『*Chambers' Journal*』誌に掲載された。
- 4 この日記は、17歳の誕生日に母親から贈られ日記帳からはじまり、アグネスは1863年に他界するまで彼女にとって大切と思われたことを書きつづけた。したがって1849年、すなわちジェーン・W・ラウドンが42歳(夫の死から6年後)からの記録が、この日記に残されている。
- 5 注2の評伝の扉絵より。所蔵は曾孫のMrs Rex Spofforth。
- 6 この屋敷は赤レンガ造りのジョージ王朝様式の建物で、父親はジェーンが生まれた直後に購入していた。この建物は1950年代までは現存していたが、中学校建設のために壊されてしまった(Howe, 1961. p. 29)。
- 7 “Lines Addressed to my Father on his Birth Day”. From Editor’s Introduction of Jane (Webb) Loudon, *The Mummy!: A Tale of the Twenty-Second Century*, edited by Alan Rauch (1994, Univ. Michigan Press), pp. x-xi.
- 8 “A Short Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon”. By Jane Loudon. Preficed to John C. Loudon, 1845, *Self-Instruction for Young Gardeners, Foresters, Bailiffs, Lond-Stewards, and Farmers*.

- 9 メアリー・ウルストンクラフト・ゴドウィン・シェリー(Mary Wollstonecraft Godwin Shelley: 1797-1851) は英国の小説家で、もっとも初期のフェミニストとして知られる。
- 10 Mary L Pendered, 1923. *Jon Martin: His Life and Times*. Hurst and Blackett.
- 11 前掲(注7)の“A Short Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon”.
- 12 この家はいまも現存している。住所は「No. 3 & 5, Porchester Terrace」。2世帯用に設計され、No. 3にラウドンが、No. 5にはラウドンの母親と彼の二人の姉妹(Jane and Mary)が暮らしていた。新婚のラウドン夫妻が暮らしはじめたのは、いうまでもなくNo.3である。この場所は、当時はロンドン郊外の別荘地だったが、現在の地下鉄の駅ベイズウォーター周辺は中華料理をはじめ各種のエスニック料理の店が立ち並び、バックパッカー向けの宿もたくさんある。ロシア正教の大きな教会があり、「モスクワ通り」などロシアにゆかりの地名がいくつか残っているのも、一時期は移民が数多く住んだ地域だったのだろう。
- 13 前述の注3参照。
- 14 Loudon, Mrs., 1840. *Instructions in Gardening for Ladies*. London: John Murray. pp. v-vi.
- 15 以下の引用は初版(1840年)による。
- 16 いまでは192点の版權無料の図版集が「CD-ROM」版で手に入る。Jane W. Loudon., 2007. *Ladies' Flower Garden CD-ROM and Book*. Dover Publications.
- 17 1841年には『ガーデナーズ・クロニクル(*Gardeners' Chronicle*)』を創刊し、園芸雑誌界に不動の地位を得る。また1851年のロンドン万博の会場「クリスタル・パレス」を設計し、経済的・社会的にも大きな成功をおさめた。
- 18 カンドル(Candolle Augustine Pyrame de: 1778-1841) スイスの植物学者。世界の高等植物の100以上の科について膨大な植物誌を編纂しようとし、死後は息子(Alphonse Louis Pierre Pyrame de: 1806-93)が引き継いで、100以上の科をまとめあげた。生涯のあいだに7000以上の新種、500以上の新属を記載したとされ、彼の分類体系は英国のJ・リンダリー(後述の注22参照)やJ・D・フッカーなどの分類学の基礎となったとされる。また植物器官学の基礎も築いた。
- 19 1870年、つまりジェーン・W・ラウドンの死後に刊行された新版による。
- 20 1858年刊の第7版による。

- 21 第2版(1851年)による。
- 22 「ロンドン園芸協会」(the Horticultural Society of London) は1804年に創設され、1861年に勅許をえて「王立園芸協会」(the Royal Horticultural Society)となった。
- 23 リンドリー(John Lindley: 1799-1865)は、英国人の植物学者、園芸学者。1829年にロンドン大学(後のユニヴァーシティ・カレッジ)の初代植物学教授に就任。リンネ式分類体系に反対し、自然分類体系を展開したことにより、近代植物学の父といわれる。王立園芸協会の庭園事務局長補佐、協会副事務局長、名誉事務局長などを歴任し、またダーウィンの愛読誌だった「ガーデナーズ・クロニクル」誌の編集人も長くつとめ、園芸学の発展にも多大な寄与をした。ロンドン大学教授就任直前には、ジョン・C・ラウドン『植物百科 (*Encyclopedia of Plants*)』(1829年)の大部分を匿名で執筆していた。
- 24 一例として、チャールズ・ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィンの詩『植物の愛』(1779年)をあげれば、当時の女性たちがどうして赤面せずにそれを読めたのか、また厳格な家父長制のもとで男性たちがなぜそれを許していたのか、誰もが不思議に思うのではないだろうか。『植物の愛』の全文は、E・ダーウィン他(荒俣宏編訳、一九八四年)『英国ロマン派幻想集』(『世界幻想文学大系35』国書刊行会)で見ることができる。
- 25 初版のファクシミリ版による (Baker, N. ed., 1984. Published by The Paradigm Press for the Members of The National Trust.)。
- 26 パクストンについては、前述の注17参照。
- 27 「水晶宮」については、松村昌家『水晶宮物語——ロンドン万国博覧会1851』(1986年、リプロポート)がとても参考になる。またこの前後の時代の温室の発展については、拙論「英国の温室の歴史と椰子のイメージ」(『園芸文化』第1号:16-39ページ)を参照されたい。
- 28 リンドリーについては、前述の注23参照。
- 29 そのうちの一人、雑誌編集者のロバート・チェンバーズ (Robert Chambers: 1802-71)は、妻とともにロンドンに出てきたときにはラウドン夫妻の自宅に泊まっていた。チェンバーズはスコットランド人の作家、編集者、出版者。彼が兄と発行していた『*Chambers's Edinburgh Journal*』は当時の有力な学芸雑誌で、最盛期には8万4000部が発行されていた。アグネスの作品「The Lost Groves」が、この

雑誌の1844年のいずれかの号に掲載された。チェンバーズはまた、匿名で出版した『創造の自然史の痕跡 (*Vestiges of the Natural History of Creation*)』(1844年)でも歴史に名を残している。この本は進化論を唱えた英国では最初の本であり、ダーウィン『種の起源』(1859年)が出るまでもっともよく読まれた。ダーウィンはこの本の観念論を極度に毛嫌いしていた。

- 30 英国の小説家。下層階級を主人公とした社会的弱者の立場に立つ作品を次々に発表した当時の人気作家。代表作は『オリバー・トゥイスト』(1837-39年)、『クリスマス・キャロル』(1843年)、『二都物語』(1859年)など。新聞記者の経験を基盤にした社会的な発言でも知られ、救貧法に強く異議を唱えた。当時の下層階級の風俗の資料として、今日でも価値を失っていないとされる。別稿(170ページ～も参照されたい)。
- 31 もともとは大英博物館の一部だったが、1973年に分離され独立し、かつて亡命時代のマルクスや明治の鬼才・南方熊楠が勉強に通ったドーム屋根の図書室は、いまは記念館となっている。
- 32 HP「Victorian Short Fiction Project」(http://vsfp.ctlbyu.org/index.php?title=Category:The_Ladies_Companion_at_Home_and_Abroad)。
- 33 『パンチ』の創刊時からの編集部員。兄ヘンリー・メイヒュー(Henry Mayhew: 1812-87)はジャーナリストで、ロンドンの下層階級の調査報告『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1851年)で知られ、また前述のマーク・レモンとともに『パンチ』を創刊した。『ロンドンの貧民』からの抜粋編集版の邦訳は、ヘンリー・メイヒュー(ジョン・キャニング編)『ヴィクトリア朝ロンドン路地裏の生活誌』上下巻(植松靖夫訳、原書房)。
- 34 劇作家などさまざまな分野で活躍するとともに、『パンチ』の編集者の一人であった。
- 35 興味深いことにディケンズが編集人をつとめた週刊誌『*Household Words*』(1850年3月27日創刊)も、発行元のBradbury & Evansとの意見の食い違いのため、1859年5月28日号をもって廃刊された。ただし、ディケンズはただの編集人ではなく出資者でもあり、この雑誌もBradbury & Evans社から完全に独立し、『*All the Year Round*』と装いを変えて継続され、ディケンズが1870年に死去した後も1895年までつづいた。